

草原の椅子展 一問一答

宮本輝氏に「草原の椅子」にまつわる背景やエピソードなど、ミュージアムからの質問にお答えいただきました。



宮本さんの中で特に思い入れのある登場人物は誰ですか。

やっぱり富樫でしょうね。たたき上げで、カメラの量販店を興した人です。それと、富樫の父親と母親、それから彼の実家で飼っているボスという老犬にも思い入れがありますね。モデルは特にありません。ゼロから作っていくものなので、富樫の実家をどこにするのかを決めるのに、瀬戸内のあの辺りを車で何回も行きました。

作品展開の中で特に記憶に残っているものがあれば教えてください。

やはり、出だしの富樫が女に灯油をかけられるところでしょか。想像しただけで怖いでもんね。それから圭輔が登場するところ、どうやって登場させるかですね。それとやっぱりフンザへの旅。この3つというのは物語の要です。

連載当時の印象的なエピソードがあれば教えてください。

僕は大体原稿の提出が遅い方なんです。しかし、この作品を書いたとき、もう50歳になりますから、

新聞社、出版社、担当の記者に迷惑をかけるのはよくない。それに、自分自身もせっかちになってきて、1ヶ月分くらいはストックがないと気が落ち着かなくなってきたんです。若い頃は、明後日の分までしか書いていなくても平気で夜遊びしていたんですが、ちよつと書き方を変えようと思いました。他の仕事もありましたが、少なくとも2週間分のストックがあるという状態をずっとキープしながら書き終えた初めての新聞小説です。こっちの書き方が精神衛生上良いし、担当者も助かる。そういう書き方が初めてできた小説ですね。今は1ヶ月、2ヶ月分のストックがあるようにしています。その方が自分も楽ですから。

現在連載中の「田園発 港行き自転車」の主人公も50歳です。「50歳」という年齢に特別な想いがあるのでしょうか？

昔、まだ30歳になる前に、ある方から「俺は、50を越えた人間の情熱以外信じない」と言われました。50歳になると一体何が変わるのかということは、実際に50歳にならないとわからないですよ。48歳のときに阪神淡路大震災が起こって、その後シルクロード6,700キロの旅に出ました。その時に、その方が

おっしゃったことをそれまでずーっと考えてきたけれど、2年後、自分がどう変わるのか分かりつつありました。

人間50年生きていると、大きな病気をすることもあるだろうし、単に肉体的な変化だけでなく、サラリーマンだと会社の中での立場や地位なんか、がらつと変わっていく年代です。子どもがいる場合は子どもの問題を抱えますし、夫婦の問題も起こってきます。「越すに越されぬ田原坂^{たはらさか}」のような坂を越えなくてはいけない。それを一つ越えるという感じでしょうか。そうやって50代に入った人間が、20代と同じ情熱を保ちつづけていたとしたら、その情熱は信じるに足るものという意味かな、という風に受け取ったんです。そして50歳になる頃にこの小説の準備を始めることになって、それなら50歳の坂を越えた男たちを出そうと決めました。一人は企業人間、もう一人はたたき上げの職人みたいな人で、接点がないんです。でも両方が「善なる人間」なんです。それはやはりお互いの良さを認めて、結びついていかざるを得ない。そういうコンビでどういう物語を織り上げていこうか、というのがスタートしたときの僕の心構えでした。

物語の佳境で、憲太郎たちは「世界最後の桃源郷」とよばれるバキスタン・フンザへ旅に出ます。宮本さんもフンザを旅されましたが、憲太郎たちの旅の行き先をフンザに決めた理由は何だったのでしょうか。

言葉で説明できないですが、フンザは本当に美しいところです。中国の国境を越え、カラコルム山脈をずっと越え、中国側から入るときは標高5,000メートルあります。道の右側は千尋の谷底でインダス川が流れていて、道の左側は禿山でいつ岩が落ちてくるかわからないし、しかもその道路は舗装もしていないので、路肩の方へ寄つたらずるずると崩れて目の下200メートルくらいインダス川に落ちる。そうやってクンジュラー峠を越えて、険難な道をのろのろのろのろと行つてやがてフンザが見えてきます。ディラン、ウルタル、ラカポシという3つの名峰がありまして、この3つの峰が作る三角形の真ん中にフンザがあります。ホテルのベランダに座るとこの3つの峰がすべて見えるんです。それも遠くにはなく、すぐそこに見える。真夜中の星もとても美しいものでした。あんな星空、日本で見えるところはないと思います。こんなところ二度と来れないだろうと思います。もうあのインダス川の横を通るの嫌や(笑)。でも、そういう命がけで行かなければいけないところだからこそ、「世界最後の桃源郷」として残ったのでしよう。簡単にヘリコプターで行けるとなったら、あれだけの美しさも、ありがたみもありませんから。自分の小説で書くとしたら、フンザだけは書かないといけないと思いました。

タクラマカン砂漠にも行かれましたが、実際に砂漠に立ったときの感想を聞かせてください。

日本列島の面積と同じですからね。真ん中に立つたらどこが北で南かなんてわからない。そのでかさに、

これは一体何なんだ、何のためにきたんだと、ただ茫然とするしかない。「死人の枯骨を道標とする」という昔の中国の言葉があります。砂漠に彷徨いこんだら、砂嵐で静電気が起こって、仮に精巧なコンパスを持っていても狂うんですよ。正確な方向をささなくなる。人間の脳の中にある方向探知機能みたいなものも、狂ってしまうんですね。すると、自分は今来た道を戻っているつもりがどんどん奥へ入ってしまった、もう助かりません。乾燥地帯ですから、たちまちミイラになり骨だけになる。その骨を見て、「あ、ここで人が死んでいるから後戻りしよう」と。死人の枯れた骨を道標とする。空に飛ぶ鳥なく、地に走る獣なし。全くそういう世界です。それを見てから、また苦しいクンジュラー峠を越えてたどり着くフンザがすごいんです。辛い旅を乗り越えたご褒美として、ここに誰かが小さな国を作ってくれたようなね。夢の国に来たような気持ちになります。ああ、よく生きてたなあ。

砂漠には割と朝早くに着きました。砂漠の夜はものすごい嵐ですから、そこにどんなに人の足跡があろうが、巨大な波が打つたようになって消えるんです。だから、そこを歩くのは僕が最初なんです。とりあえずちよつと向こうまで行こうかと歩き出して、ふつと後ろをみたら、僕の足跡だけがずっとそこに続いている。それが、「宮本輝」という一人の人間の存在を教えてくれるんですよ。そうすると、もつと足跡をこの砂漠につけていきたいと思うんです。また一歩、また一歩、どこまでも行きたくなる。もう、どんどん行つてしまえ、帰るときは足跡を見たらいい。あれが砂漠の悪魔の囁きですね(笑)。でも自分が今ここに生きていて、存在している。しかも自力で歩いてきたんだ、ということが振り返るたびにわかるんです。これは誰かが偶然写した僕の後ろ姿を見るよりも、強烈なものでした。

「草原の椅子」をはじめ、宮本さんが描かれる作品には「旅」を取り扱ったものが多くありますが、宮本さんの考える旅の醍醐味とは何でしょうか。

旅をすることは、僕にとって仕事なので、観光客の暇じゃないんです。だから、美しい景色を見たり、名所を見たりするのは好きではありません。それよりも、その町に住む人々の息吹みたいなもの、例えば子どもを背負ったお母さんが洗濯物を干しているとか、路地から子どもが走り出てくるとか。どこの国へ行っても、そういうごく普通の庶民が住む下町を見たいんです。それぞれの国の暮らしぶりとか、日本と少しも変わらない営みや逆に決定的に違う営みは、観光地では見れないし、通りすがりの観光客の眼ではわからない。1日ぶらぶら歩いたらそれでいいんです。そういう旅の仕方ですから、そのときに「これを小説に使おう」ということは全く考えていないですね。

作中には憲太郎と富樫が今の日本を嘆く場面が何度も出てきます。執筆を終えられた1999年から13年経った今、日本の状況はどう変化したでしょうか。

たった13年でますます悪化してますね。国民の精神性というのが非常に後退し弱体化している。教養とか「人の道を歩く」ということに対して、非常に低レベル化したという気がします。

憲太郎が想いを寄せる篠原真志子は陶磁器店で働いています。宮本さんはどんな焼き物が好きですか。

焼き物は好きですが、阪神淡路大震災で大事なものは全部粉々に割れてしまいました。安物ばかり残りました。がっかりしてしまっ、もう自分で買うことはなくなりました。ただ華美でないものが好きです。ですので、伊万里、古伊万里、唐津あたりの小さいものが好きですね。長次郎の黒染茶碗なんて、1時間でも2時間でも観ていられますね。不思議だなあ、どうしてこんな形が出来るのかなあ。芸術の極致というものが既に700年、800年前に完成の域に達していたんじゃないかと。もう超えられないなと思います。

凝り出したら身上をつぶしますし、それで地震で割れたらどうにもなりません。ああいうものは美術館で観るものと悟りましたね(笑)。

作中には、鍵山という青年が自費出版した「翼」という写真集に憲太郎と富樫が感化され、自分たちも写真集を作ることを決意するシーンなど、「写真」に関するエピソードがいくつか登場します。宮本さんもカメラで撮影するのは好きですか。

取材に行ったときに撮るくらいですね。この物語では、鍵山という青年が「翼」という写真集を出しますが、そこへ導いたのは結局遠間なんです。鍵山が高校生くらいで写真のコンテストに応募してきたときに、本当は奨励賞だから賞品はないのだけど、遠間が自分の会社のカメラを賞品としてあげた。それによって鍵山はやがて写真に目覚めていくわけです。そうして鍵山が自分の「翼」という写真集を見せることによって、今度は遠間と富樫が写真に目覚めていく。他人にしてあげたことが自分

返ってくる。若い人を励ましてあげる、激励してあげる、下から支えてあげるという、遠間のちよつとした行為がやがて自分たちに大きな楽しみをもたらしてくる。そういうことをそれとなく示唆したかったんです。

富樫が、テレビで特集されていた星雲に自らの生を重ねて悟りを開く場面が印象的です。宮本さんも宇宙に想いを馳せられることはありませんか。

あの富樫は完全に僕です。夜中にあるテレビ番組で、ハッブル宇宙望遠鏡から見た、2千光年彼方の星雲や、1万光年彼方の宇宙がずつと映っていたんです。その中に、ある巨大な星雲がありました。その星雲の大きさだけで、地球がある銀河系の30何倍あって、それが女性の子宮のような形をしているんです。そして、端っこに紫色の管のようなものがあって、そこから緑色の玉のようなものが映っているんです。これが今まさに生まれようとしている星なんだと。この星の大きさが太陽の500倍で、やがて成長すると太陽の何千倍もの

熱を持つ。成長するのにおそらく50億年くらいかかる。見ている頭がボーっとしてきました。それが何かの科学雑誌で見た女性の卵管から卵子が子宮に下りてくるというのに凄く似てたんです。これは子宮と卵巣と卵子と同じなんだ、俺もこうやって生まれたんだ、だから俺は宇宙なんだと。それをそのまま富樫に言わせました。

富樫

2012年5月

